

平和への願いをこめて
12 沖縄戦後編
創価学会婦人平和委員会編



いくさやならんどー

米軍の一大攻撃を受け
鉄の暴風に打ち砕かれたうるま島
からうじて生き残った人々にも
戦後の平和は無かった――



第三文明社

《シリーズ》平和への願いをこめて⑫
沖縄戦後編
いくさやならんどー

昭和五十九年十二月二日 初版第一刷発行

編者 創価学会婦人平和委員会

発行人 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区三崎町一―一九

電話(二九四)八七三二(代)

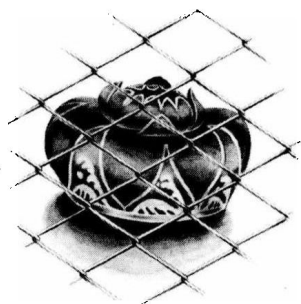
振替・東京五―一―七八二三

印刷所 大日本印刷株式会社

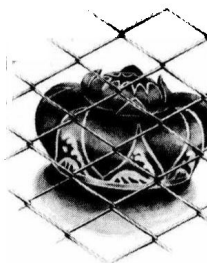
ISBN 4-476-07512-6

*乱丁落丁本はお取り替えいたします
Printed in Japan

平和への願いをこめて
⑫ 沖縄戦後編
創価学会婦人平和委員会編



いくさやならんどー



まえがき

悪夢の地上戦——あれから四十年の歳月が流れようとしています。

本土決戦の捨て石として、たった三ヶ月間で二十余万人の犠牲者を出し、県民の三分の一を失った沖縄戦。住民を巻き添えにしたというよりは、住民を盾にして展開されたその戦闘は「戦争の醜さの極地」とまでいわれるものでした。しかし、その地獄絵図の中を辛くも生きのびた人々がやっと迎えた戦後も、決して安穏なものではありませんでした。

アメリカ統治下、基地の島と化した沖縄では、意識するとしなやかかわらず人々は、基地経済によって生活を支えねばならなかったのです。こうした幾重にも重なった悲劇の中を、身心にわたる傷跡をひきずりながら、なお、生きるために、人々がどのような人生を歩まなければならなかったか。

シリーズ「平和への願いをこめて」第十二巻の本書は、この戦後を生きた女性達の姿を通して沖縄の戦後を照らしてみたいとの意図のもとに編纂されました。

本書は、「孤児として廃墟に残されて」「戦争後遺症をかかえて」「焦土に遺骨をたずねて」

「基地の街・沖縄」「アメリカ世の女たち」「戦後を生きて」の六つの章に分かれています。

初めの三章には、沖縄が唯一日本で地上戦の行なわれた地域であることからおこったさまざまな悲劇が記されています。

後の三章は、沖縄が戦後、基地の島となった歴史的事実のもとに、女性達がどのような生き方を強いられたかという視点からの手記をまとめました。そして、そこに浮きぼりにされた彼女達の半生——その一編一編を読んだとき、おそらくこの『いくさやならんどー』ほど、女性そして子供達が蒙った戦争の悲劇を赤裸々に語ってくれるものは少ないのではないかと思います。

私自身、いままで何度か足を運んだ沖縄でした。いま、これ等の手記を手にしたとき、彼女達の笑顔の裏にある苦しみに触れた気がしました。もちろん、ほんとうの苦しみは人には語れないものに違いありませんが、改めて、彼女達の味わった筆舌に尽くせぬ戦争の傷跡の深さを思い知らされ、これまでの沖縄に対する理解の浅さを反省すると同時に、頭をたれる思いでこれらの痛みを受け止めるものです。

寄稿された一人ひとりの方が、その戦争体験を勇気を奮い起こして語り、筆を執ってくださいましたことを知るにつけ、一人でも多くの人々にこの事実を知っていただきたいと思っています。

沖縄——その苦渋に満ちた歴史。かつてマリノロード（海上の道）を自在に行き交い、交易

と文化交流の主役として、豊かな「守礼の邦」を創りあげた沖縄。その人々が、一転して苦難と忍従の歴史を歩まねばならなくなったのは、一六〇九年の薩摩の琉球侵攻からでした。以来明治政府による琉球処分、そして太平洋戦争による多大な犠牲と、心安まる日の一日とてなかったその歴史を振り返ってみる時、私達はそこに日本という国の覇権主義の色濃い影を見るような思いがし、愕然とせずにはおれません。

そして現在なお、戦後最悪といわれる米ソ関係の峽間で、核戦争の恐怖の最も身近な存在としてある極東最重要基地・沖縄。

昨年三月、沖縄研修道場において池田名誉会長は、現況の沖縄を国際的な視点から洞察され、「沖縄は、今、歴史的な分岐点にあるように思う。それは、再び戦争犠牲の道を進むか、あるいは平和象徴の道を進むかである。その中間の道はないのが沖縄の宿命である」と話されました。日蓮大聖人の仏法を基調にして恒久平和の実現を目指す私達の使命、とりわけ沖縄に課せられた使命の重さを痛感せずにはいられません。

なお巻末の座談会には、女性史研究家であり、沖縄に深い想いを寄せていらっしゃるよろさわようこさんにご出席いただきました。

そして、琉球大学教授の大田昌秀氏には「戦後の沖縄と女性の生き方」と題して筆を執っていただきました上、出版に対しても貴重なアドバイスを頂戴しましたことを、心より感謝申し

上げます。

また巻末には寄稿してくださった皆様に感謝の思いをこめて全員の氏名を掲載させていただきます。

なお、ご本人またご家族の方々へのご迷惑を配慮し、一部匿名としましたことも、あわせてご了承ください。

最後に、出版にあたり、執筆、編集に限りないご尽力をいただきました多くの同志の皆様方、および第三文明社の方々に心より御礼申しあげます。

昭和五十九年十二月二日

創価学会婦人平和委員会

委員長 浅野香世子

もくじ

まえがき

孤児として廃墟に残されて

私は「マケミ」？……………宮里孝子

夢中で生きた孤児の日々……………松田トモエ

「おっかあ」と呼んでみたかった……………名嘉京子

私は誰なの？……………大泊ヨシ子

戦争後遺症をかかえて

痛みをこらえ続けて……………田野トヨ子

返されてきた申請書……………宮里千代子

長袖に包まれた左腕……………安里由紀子

渡嘉敷島での自決から生きのびて……………金城ウタ

焦土に遺骨をたずねて

「スパイ爺さん」と呼ばれた父は……………照屋トミ子

色濃く茂った草むらの下に……………山田信子

基地の街・沖縄

弾薬倉庫の中で……

富浜フミ 123

二十五年前の悪夢……

渡久地ツル子 132

我が子を奪ったジェット機事故……

佐久川千代 140

アメリカ世の女たち

ふみにじられた青春……

匿名 147

基地街という名の地獄……

匿名 154

ホワイトビーチ周辺……

匿名 164

キャンプシュワープに生きて……

島袋幸子 172

戦後を生きて

「無国籍」の子を抱えて……

神谷静子 183

「ねえ、スタンビー……」……

国吉サチ子 195

セーラー服の涙……

匿名 205

「黒い髪の子」と「金髪の我が子」……

匿名 215

《座談会》「生命ドウ宝」を誓って……

もろさわようこ・他 223

《解説》沖縄の戦後と女性の生き方……

大田昌秀 249

《コラム》 沖縄戦の中で

嘉義丸遭難で死んだ兄 仲田節 112

十・十空襲 嘉手納繁子 113

自然壕の中で 椿博子 114

捕虜生活 知念トミ 117

《コラム》

栄養失調で死んだ妹・真謝久子 34／母の遺言・大城千世子 54／悪性マラリアとの戦い・三盛節 90／オバケカボチャ・奥里ヒデ 120／不発弾撤去の犠牲になった夫たち・国吉しず 132／オキナワピール、ジャストネーコ・金城ツル 139／異民族支配の下で・花城シゲ子 144／恥多き人生を生きて・匿名 171／助産婦として・新里ヨシ 194

あとがき
編集後記

表紙・本文イラスト／前田寛
装幀／高久省三

孤兒として廢墟に残されて

第一次世界大戦中、日本で唯一の地上戦となった沖繩戦は、昭和二十年六月二十三日、沖繩守備軍第三十二軍の壊滅をもって終わった。しかし、掃討戦はその後も続き、降伏文書が交わされ、沖繩戦が公式に終結したのは九月七日である。だが、この日をもって、大量殺人と無意味な破壊を繰り返した戦争の悲劇に終止符が打たれたわけではない。

沖繩戦での最大の犠牲者は一般住民であった。なかでも幼児童の悲劇は筆舌に尽しがたい。一般住民の戦死者九四、七五四人中、十四歳未満の幼児童の犠牲者は一万一四八三人で一般住民の戦死者全体の一二、一パーセントを占めている。その犠牲のケースは、壕提供によって、戦場へ放り出されたのが一万一〇一件で、八十八パーセントにのぼっている。

戦争の爪跡は、辛うじて生きのびた人々の戦後の人生に、色濃い影を落とし、その悲劇は今も続いている。ここに収められた証言が語るように、保護者を失い、孤児となった子供たちを待っていたのは、食糧不足、マラリア、戦後の混乱だった。

沖繩戦で孤児となった子供たちは、およそ一千人といわれている。保護者を失って、戦場を彷徨する孤児を米兵は保護するとともに、田井等、瀬嵩、漢那、石川、前原、胡差、糸満、百名、首里に孤児院を開設して収容した。なかには、生まれて間もなく両親を失い、名前も付けられずに収容され、無戸籍のまま成人した孤児もいた。世の中が落ちつくくと、孤児たちは養子として引きとられた。しかし、ここで待っていたのは、労働力としての苦しい毎日だった。

戦後三十九年。戦争孤児たちの戦後は、肉親さがし、生活苦と心身にわたる安らぎのない歳月であった。戦争が、いかに埋めることのできない心の空白を刻印するか、孤児たちの証言が胸に突きささってくる。

私は「マケミ」?

みやもとたかこ
宮里孝子(39歳)
那覇市石嶺在住

◇昭和二十年五月十五日、壕の中で生まれ若い二人のアメリカ兵に羽地村の孤児院につれて来られた赤児。アメリカ兵は、その子に「マケミ」と名前をつけたという。しかし、その子の両親は誰なのか、戦後三十九年を迎えた今も、手がかりすらない。まだ見ぬ母を捜し続ける「マケミ」の前に、幸福の女神がほほえむのは、果して何時なのだろう?

物心ついた頃から「お前の両親は、本当の親ではない。お前は、戦後、孤児院からつれて来られたそうだ」という近所の人達のうわさや、親戚の人達がコソコソと話すのを、何度か耳にしながら、本当のことであってほしくない、不安な気持ちで過ごす毎日でした。

父は若い頃から、ハミ一つもって、古くなった家の解体をするのが本職でした。私が二、三歳の頃までは、アメリカ軍の基地内の解体業を専門としており、仕事も多く、なかなか羽振り

の良い生活をしていたようです。しかし、ベース内の仕事をやめた後は、あまり仕事にありつけず、酒を飲んで家の中でごろ寝ばかりしました。

記憶があまり定かではありませんが、おそらく、私が小学校に入学してまもない頃だったと思います。酔った父は私を呼びつけて自分の前に正座させ、棒でこづきながら「お前は、俺を本当の親だと思っているのか。イヤーヤ、ワンクッヤアラン（お前は、俺の子じゃない）」と、大声で怒鳴ったり、足蹴にしたりするのです。怒鳴られたり、足蹴にされることには慣れていましたが、親の口から「俺の子じゃない」と初めていわれて、目の前が真っ暗になるような、精神的ショックをうけました。

その頃は、毎晩のように泥酔して暴力をふるう父に見つかるのが怖くて、夜になると、押し入れや、隣家の軒下、友人の家、そして拾ったみかんの空箱の中など、まるで犬のように、寝場所を求めて歩きました。

考えてみると、両親に可愛がられた記憶がないのです。

「私の両親は、父がいうように、本当に他にいるのではないだろうか」と、確信にも似た気持ちで、そう思い込むようになっていました。時には本当のことが知りたくて、母に何度も問い詰めたのですが、母は話を濁すだけで、答は返ってきません。一人で思い詰める日々が続きました。

「生活費は主人が稼ぐもの」と頑なに考えていた母は、泥酔して、ゴロゴロしている父を横目で見ながらも、外に出て働こうとはしません。貧乏のどん底で、食事もまともに与えてもらえず、私は、物心ついた頃から、ずっと自活を余儀無くされていました。

小学校三年の頃には、母の兄嫁にあたる伯母や従姉達と一緒にスクラップや空瓶の回収をしたり、那覇市の大通りや映画館等で靴みがきをしたり、果物やガム、アイスクャンディ等を買ったりしてはパンを買い求め、何とか食いつないでいました。衣服は、近所の友達や、親戚の子からお古を貰い、いつもブカブカで、不格好な身なりばかりでした。

こんな生活の中でも、ことさら悲しかったことは、運動会や遠足の時でした。クラスメートは、親子連れで楽しそうにお弁当を食べたり、ふざけあったりしているのに、弁当さえ作ってもらえなかった私は、いつも一人ですきつ腹をかかえて、楽しそうな人達を眺めていなければならなかったのです。人前では、決して涙を見せたことのない私でしたが、こんな時には人目を避けて涙しました。

教科書は、当時は有料だったのですが、私は買って貰うことができず、友人に分けてもらう以外、手に入りませんでした。今の子供達は、恵まれていて本当に幸せだと思っています。

悶々とした日々を過ごしていた私は、小学二年の時、いつも一緒に靴みがきをしている伯母に、思い切って私の出生について聞いたできました。